

8 14:00 歯科医師国家試験対策としての強化補講「生体材料学演習」の意義とその学習効果

○永松 有紀、池田 弘、清水 博史

九州歯科大学 生体材料

当分野では生体材料学関連内容の歯科医師国家試験対策として、2014年度から補講「生体材料学演習」を行ってきた。2016年度からは8回(15コマ)実施し、学生に対する学習支援に力を入れている。本研究では、2017年度実施の本補講内容に関する「学生へのアンケート調査」と「模擬試験」等の結果から、補講の意義と学習効果、さらに改善点について検討した。

全8回の補講の実施は歯学科6年生代表への連絡と掲示板を通して、各回、学年全体に通知した。演習問題を事前配布し、自身の力で解答するように促した。その問題の解答・解説を中心に、国家試験問題の分析結果も加えて補講を行った。第7回は模擬試験を実施した。演習問題の事前解答の有無、補講に対する理解度・満足度等についてアンケート調査を各回行った。これらの結果から本補講の意義と学習効果を分析し、改善点を明らかにした。

全8回を総括すると、出席率 $67.2 \pm 8.6\%$ 、演習問題の事前解答率は回答者の $65.3 \pm 15.8\%$ であった。学生の自己分析による講義の理解度は $68.9 \pm 2.6\%$ 、講義に対する満足度は $80.2 \pm 3.1\%$ であった。自己学習との違いについて「見落としていた点に気づいた」、「間違いやすい箇所がわかった」、「解答の仕方がわかった」の1~3つを選択する回答者が $95.9 \pm 4.1\%$ であり、ほとんどの受講学生に学習効果が認められた。

本補講の出欠は学生の自由意志に基づくため歯学科6年生全体に学習効果をもたらしたとはいえない。次年度以降、出席率を上げ、学年全体の学習効果を向上させるために、項目ごとに学生の理解度に応じた補講(基礎編・実践編)を行う必要があると思われる。

9 14:10 本学附属病院診断科を受診した患者の全身疾患ならびに服用薬剤に関する統計学的検討

○椎葉 俊司、大渡 凡人、青沼 史子、栗野 秀慈、大谷 泰志、鬼頭 慎司、久野 綾子、曾我部浩一、原口 和也、榎原 絵理、宮下 桂子、宮嶋隆一郎、吉居 慎二

九州歯科大学附属病院 診断科

本学附属病院診断科は平成29年4月に開設された。診断科業務の一つに患者プロフィール入力があり、病歴、薬剤情報などの患者情報が含まれる。患者情報は安全な歯科治療実現において必須である。

平成29年4月より12月までの9ヶ月間に、診断科で調査・入力した新患患者プロフィールを後方視的に調査し、歯科治療総合医療管理料(以下、医管)の対象疾患、ならびに「お薬手帳」に基づく薬剤情報について統計学的に検討した。

調査期間中に診断科を受診した患者総数は1,589名(男性570名、女性1,019名)で、年齢幅は0歳から96歳であった。このうち、高齢者(65歳以上)は37.4%(595名)を占め、その65.7%が何らかの医管対象疾患を併存していた。高齢者の医管対象疾患の内訳は高血圧症が最も多く157名、骨粗鬆症139名、糖尿病117名、不整脈96名、喘息が77名、次いで脳血管障害70名、狭心症73名、甲状腺疾患62名、心筋梗塞19名、心不全15名の順であった。医管対象疾患をもつ患者のほとんどに治療薬剤が処方されていた。

我が国は世界で唯一の超高齢社会であるが、北九州市の高齢化率は政令指定都市中第一位である。今回の調査ではわからないが、人口動態から考えれば、本学附属病院においても、全身疾患をもち、医学的リスク管理を要する患者が増えていることが予測される。一方、服用薬剤には経口抗凝固薬、ビスフォスフォネート製剤など、歯科治療において問題となるものが少なくなかった。今回調査した患者情報は、附属病院の安全管理を考える上で重要であり、今後、プロフィール入力を充実させる必要があるものと思われた。